

復讐譚としての『こころ』

— 遺書に書き残された真相 —

柳澤浩哉

(2007年10月4日受理)

The Causality of sin in “KOKORO”
— The fact hidden in the suicide note —

Yanagisawa Hiroya

Abstract. In the novels of SOUSEKI, the narrator often tells the story without reference to the important facts. Because the narrator does not perceive existing conditions fully. He has the limit of knowledge, prejudice, bias, or his particular thinking manner. But SOUSEKI left the clues to guide the reader the truth in the text. In this study I show the some truth of “KOKORO”. (1) the causality of sin between SIZU and SENSEI (2) the illusion of SIZU'S tactics (3) SIZU'S coquettishness

Key words: KOKORO, SOUSEKI, suicide note, sin

キーワード：『こころ』、漱石、遺書、復讐

0 『こころ』の何を問題にするか

『こころ』はあらゆる世代を通じて日本人に最も多く読まれている小説である¹⁾。高校の教科書においても圧倒的な被収録数を誇り、研究や評論の類も膨大な数に及ぶ。しかし、『こころ』には読み解かれていない箇所がまだ数多く残されている。本論は、第三部の「先生と遺書」に限定して、次の三点を論じる。

- 1 「先生」の復讐譚
- 2 静は策略で動いたのではない
- 3 静はなぜ男たちを翻弄したか

漱石作品の特徴をこのスペースで論じることは不可能だが、漱石作品の重要な特徴として、語り手に出来事の全貌が見えていないことをあげておきたい。もう少し具体的に言えば、語り手は物語上の現実を的確に捉えられずに、自分が見たままを語る、すなわち語り手はしばしば事実誤認をしていることである。石原千秋氏が『三四郎』などを取り上げて、この特徴を指摘しているが²⁾、これは漱石の全ての作品に共通する重

要な特徴であると筆者は考えている。語り手の言葉を鵜呑みにしてはならない、これが漱石を読む際の注意事項である。そして、『こころ』の特に第三部ではこの傾向が強い。

遺書を綴るまでに追い込まれた人間にとって、出来事を冷静に観察し、的確に理解することは、当然ながら困難である。実際、「お嬢さん」（彼の妻となる静）と「奥さん」（静の母親）とが、かなり早い時期から「先生」との結婚を希望していたことを初め、静の様々な気持ち、さらに、Kの気持ちやKの言葉の意味について、「先生」は誤解や誤った対応を繰り返している。そして、それらの誤解は最後まで自覚されることも、改められることもない。決定的なのは、Kを死に追いやった原因の誤認である。とはいえ、漱石は「先生」の誤解や判断ミスがすぐに分かるような露骨な書き方はしていない。表面的には、「先生」の語りは冷静かつ分析的であり、妥当な自己分析が展開しているとしか見えぬ。しかし、「先生」の誤解やズレは遺書の随所に見いだせる。漱石は真相（物語内の真相）を伝えるための手がかりを随所に残しているの、それに注意して真相を明らかにしていこう。

遺書に残された手がかりから推測できる真相は、先行研究によって明らかにされている部分もあるが、残念ながらもまだまだ不十分である。明らかにすべき真相は多いが、本論ではその中から、先にあげた三点を考察したい。

1 「先生」の復讐譚

この作品には二つの復讐譚が入っている。一つは「先生」に対するKの復讐譚、そしてもう一つは、静に対する「先生」の復讐譚である。前者は当たり前であるが、後者についてはおそらくまだ指摘がないと思う。これについて考察してみよう。

「先生」の遺書は一貫して静に気を使い、彼女を壊れ物のように扱っている。しかし、彼の表面的な姿勢に欺かれてはいけな。「先生」の言動を冷静に見つめ、それが静にどのような気持ちを抱かせたかを確認していけば、彼の静に対する残酷さが理解できるはずである。彼は結婚した直後から、Kの影に脅かされていた。しかも、あろうことか、妻である静がKを思い出させる引き金になってしまうのである。

私は妻と顔を合わせているうちに、突然Kに脅かされるのです。つまり妻が中間に立って、Kと私を何処までも結びつけて離さないのです。妻の何処にも不足を感じない私は、ただこの一点に於いて彼女を遠ざけたがりました。(五十二)³⁾

彼の行動の残酷さが分かるだろうか。彼は、静の向こうに見えるKの影に脅され、それを恐れた。しかし、彼はその気持ちを隠そうとするどころか、その感情を行動に出して「彼女を遠ざけたが」ったのである。もちろん、静は「先生」とKとの間にあった事件を知らず、妻としての落ち度もない。全く理由が分からないまま、結婚当初から夫に遠ざけられていたわけである。上の引用の後で彼は次のように書いている。

時によると、妻の痛も高じて来ます。しまいは『あなたは私を嫌っていらっしやるんでしょう』とか、『何でも私に隠していらっしやる事があるに違いない』とかいう怨言も聞かなくてなりません。私はその度に苦しみました。(五十二)

静の「怨言」によって「先生」が苦しんだことは良く分かる。しかし、静もまた苦しんでいたのである。静の言葉は「怨言」などではない。これは悲痛な叫び声である。これを発せずにいられないまでに彼女は苦し

んでいた。しかし、「先生」には、「怨言も聞かなくてはいけません」としか感じられない。静は何も知らないから辛いことを無神経に言ってくる、彼にあるのはそんな被害者意識のみである。自分が静を苦しめているというのに、彼には、静の気持ちを感じようとする思いやりも、彼女を守ろうとする意志もない。残酷なまでの鈍感さと言うべきだろう。

彼の静に対する残酷さは、遺書の随所に見つけることができる。その一例として、母親が死んだ時のやり取りを引用しよう。

母は死にました。私と妻はたった二人ぎりになりました。妻は私に向かって、これから世の中で頼りにするものは一人しかなくなったと云いました。自分自身さえ頼りにする事の出来ない私は、妻の顔を見て思わず涙ぐみました。そうして妻を不幸な女だと思いました。又不幸な女だと口へ出しても云いました。妻は何故だと聞きます。妻には私の意味が解らないのです。私もそれを説明してやる事が出来ないのです。妻は泣きました。(五十四)

「これから世の中で頼りにするものは一人しかなくなった」という言葉には、「先生」への甘えが読み取れる。彼の肯定的な答え(反応)を期待しなければ、このような言い方はしないはずだから。母の死をきっかけに、自分を守ってくれる存在に変わるのではないか。母を献身的に看護する「先生」を見ていた静にはそんな期待があったのかもしれない。しかし、この期待は「先生」の言葉で見事に裏切られてしまう。彼が心の中で「妻を不幸な女だと思」ったことは責められない。問題は、それをそのまま「口へ出して」しまう彼の鈍感さ、残酷さである。静が彼のやさしさを期待していただけに非常に冷たい言葉である。しかし、静のこの気持ちを「先生」は全く理解できていない。「妻には私の意味が分からないのです。」彼の意識の中に、静を思いやる余地は存在しない。自分が苦しんでいることが彼の全てなのである。

「先生」の静に対する残酷さは、彼の自殺の直前に頂点に達する。彼の自殺は乃木大将の殉死に触発されたものだが、殉死という言葉を最初に出したのは静である。

すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。その時私は明治の精神が天皇に始まって天皇に終わったような気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、その後に生き残っているのは必竟時勢遅れだという感じが烈しく私の胸を打ちまし

た。私は明白さまに妻にそう云いました。妻は笑って取り合いませんでしたが、何を思ったものか、突然私に、では殉死でもしたら可かろうと調戯いました。(五十五)

静が気づかせてくれた「殉死」という言葉は、「先生」にとってはある意味必然であった。彼は自殺を望みながら踏み切ることができずに苦しんでいた。この苦しみ・悩みを「殉死」という言葉が解消したのである。乃木大将の殉死をきっかけとして、その二・三日後には自殺を決意する。「先生」の自殺は決して衝動的なものではないが、これは「先生」の遺書を見て始めて分かることである。「先生」の内面が全く分からない静には、彼の自殺が全く違う見え方をしたはずである。静に彼の自殺はどのように見えたのだろうか。

結婚前はおおらかで快活であった「先生」が、結婚直後から人が変わったように影を持ち始める。自分に何か不満があるようだが、その原因は全く分からないし、何も話してはくれない。そして夫はどこか自分を避けようとしている。結婚生活の中で多少の浮き沈みはあったものの、彼の影は常に二人の生活を暗く染めていた。年月が経過しても、その影は小さくなるどころか大きくなる一方である。そして、乃木大将が殉死した直後に、夫は自分の前から姿を消した。自殺したに違いない。殉死であろう。自分が冗談に「では殉死でもしたら可かろう」と言ってからわずか一月である。夫はこの冗談を衝動的に実行したのだ。自分のために夫は苦しみ、自分の言葉が夫を殺してしまった…。このような恐ろしい罪悪感を、「先生」は静に残して行ったのである。

漱石はこの恐ろしさが確実に伝わるよう、念のいった書き方をしている。先に引用した静の「調戯い」の続きを見てみよう。

私は殉死という言葉をやど忘れていました。平生使う必要のない字だから、記憶の底に沈んだまま、腐れかけていたものと見えます。妻の笑談を聞いて始めてそれを思い出した時、私は妻に向かってもし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死する積もりだと答えました。私の答も無論笑談に過ぎなかったのですが、私はその時何だか古い不要な言葉に新しい意義を盛り得たような心持がしたのです。(五十六)

この中では「明治の精神に殉死する積もりだ」という部分が有名であるが、ここには、それ以上に注意すべき箇所がある。この遺書はなかなか曲者で、書き手(ここでは「先生」)が大事だと思っていないところに、

しばしば重要なポイント、すなわち手がかりが残されている。前述したように、これは漱石の作品に共通する特徴なのだが、遺書では特にこの傾向が強い。右の引用部で「先生」にとって重要な箇所はもちろん「明治の精神に殉死する」である。が、作品の「物語」を読み解く上では「もし自分が殉死するならば」という部分を重視しなくてはならない。なぜなら、これは静を呪縛する言葉となるからである。「もし自分が殉死するならば」という言葉は、たとえ冗談で発せられても、それは自らの殉死の予告となる。彼が本当に自殺を遂げた場合、この言葉は、静にそれを単なる自殺ではなく殉死であると解釈させることになる。つまり、彼女の言葉の実行である。その上で、漱石は「私は殉死という言葉をやど忘れていました。」という補足を忘れていない。「先生」はそれまで殉死などという言葉で静に向かって口にするのは無かったのである。そして、自殺という言葉も彼はおそらく口にしていない。(だから、静はこんな冗談を言ったのである。)

「先生」が自殺という言葉で口にしていない状況証拠として、「上 先生と私」から「先生」と静の会話を引用しよう。青年を加えた三人が、青年の父の病気について話していると、「先生」は唐突に次のように切り出す。

「静、御前はおれより先へ死ぬだらうかね」

「何故」

「何故でもない、ただ聞いているのさ。それとも己の方が御前より先に片付くかな。大抵世間じゃ旦那が先で、細君が後へ残るのが当り前ようになってるね」

「そう極った訳でもないわ。けれども男の方はどうしても、そら年が上でしょう」

「あなたは特別よ」

「そうかね」

「だって丈夫なんですもの。殆ど煩った例がないじゃありませんか。そりゃどうしたって私の方が先だわ」

「先かな」

「ええ、きっと先よ」

先生は私の顔を見た。私は笑った。

「然しもしおれの方が先へ行くとするね。そうしたら御前どうする」

「どうするって……」

奥さんは其所で口籠った。先生の死に対する想像的な悲哀が、ちょっと奥さんの胸を襲ったらしかった。けれども再び顔をあげた時は、もう気分を更えていた。

「どうするって、仕方ないわ、ねえあなた。老少不定っ

ていう位だから」(上三十四)

静は「先生」の問いに促されて始めて「先生」の死を考えたことが分かる。これ以前に「先生」が死や自殺を話題にしたことがあれば、静の反応はもう少し違っていただろう。静にとって夫の死は全く現実味の無い話題だから、他人事のような対応ができるのである。

話を戻そう。これまで自殺も殉死も考えたことなかった夫が、自分の言葉によって突如死を考え始め、そのわずか一月後、本当に“殉死”を遂げてしまった、静にはそのようにしか見えないだろう。

静に罪悪感を植えつけるにはこれだけでも十分だと思えるが、漱石はさらにダメを打っている。乃木大将の殉死を知った「先生」は次のように言う。

私は号外を手にして、思わず殉死だ殉死だと云いました。(五十六)

「殉死だ殉死だ」という興奮した口ぶりは、彼が殉死について真剣に考えていたことを伝える。そして彼の自殺はこの直後である。「先生」の死を、静が殉死以外に理解することは不可能だろう。「先生」の影、そして静の言葉を実行したとしか思えないタイミングは、自分が夫を殺したという強烈な罪悪感を静に残したはずである。

「先生」は自分がKを殺したという罪悪感に苦しめられ続けた。それは文字通り死ぬほどの苦しみである。実に皮肉なことに「先生」の死後、今度は静が「先生」と同じ罪悪感に苦しめられることになるのである。ただし、二人の苦しみは、決して同じものではない。「先生」はKを死に追いやった当事者であり、Kが死ぬまでの経緯を誰よりも知っている人物である。それに対して、静には「先生」がなぜ死なねばならなかったのか、彼がどんな影に苦しめられていたのか全く分からない。彼女に分かっているのは、「先生」が自分に何らかの不満を持ち続けていたこと、そして、自分の冗談によって殉死してしまったことである。そして、「明治の精神に殉死する積もりだ」という謎めいた言葉が彼の死をますます分かりにくいものにする。どちらも重い罪悪感であるが、真相が全く分からないという点で、静の苦しみはより“悪質”であるように、私には思える。

Kの自殺は先生を苦しめ、「先生」の自殺は静を苦しめる。復讐の連鎖である。「先生」はKを自殺と深くかかわっているから、復讐されることもうなずける。しかし、どうして静が復讐されなくてはならないのか。静がKの自殺にも大きくかかわっていたからで

ある。この問題に入る前に、静が策略で「先生」を翻弄したのかという、この作品の重要な問題を考えてみたい。

2 静は策略で動いていたか

奥さんと静が「策略家」であったという見方が、専門家の間では大勢を占めているようである。すなわち、煮え切らない「先生」を結婚に踏み切らせるためにKを利用し、親子で申し合わせてKと親しいところを見せつけたという読みである。この読みは誤っているのであるが、現在のところ主流となっているので⁴⁾、この可能性を否定しておきたい。もちろん、静が策略でKを翻弄したという読みにもそれなりの説得力がある。まず、その確認から始めよう。

「先生」が財産のあるエリートでしかも天涯孤独という、結婚相手として最高の条件であることは奥さんも静も良く知っている。その上で気心も知れているのだから、奥さんと静が「先生」との結婚を希望するのは自然なことだろう。実は、静自身が「先生」との結婚を希望しており、奥さんもそれを望んでいたという事実を読み取れる箇所がある。この箇所を少し詳しく検討してみたい。

ある日、三人は連れ立って日本橋に着物を作りに出かける。その様子が級友に目撃され、翌日「先生」は学校で「何時妻を迎えたのか」(十七)とからかわれる。家でこれを話題にしたことをきっかけに、「先生」は静の結婚について奥さんの意中を探る。奥さんの話が終わった後の静の様子は次のように描かれている。

さっきまで傍にいて、あんまりだわとか何とか云って笑った御嬢さんは、何時の間にか向こうの隅に行って、背中を此方へ向けていました。私は立とうとして振り返ったとき、その後姿を見たのです。後姿だけで人間の心が読める筈はありません。御嬢さんがこの問題についてどう考えているか、私には見当が付きませんでした。御嬢さんは戸棚の前にして坐っていました。その戸棚の一尺ばかり開いている隙間から、御嬢さんは何か引き出して膝の上へ置いて眺めているらしかったのです。私の眼はその隙間の端に、一昨日買った反物を見付け出しました。私の着物も御嬢さんののも同じ戸棚の隅に重ねてあったのです。

私が何とも云わずに席を立ち掛けると、奥さんは急に改まった調子になって、私にどう思うかと聞くのです。その聞き方は何をどう思うのかと反問しなければ分からない程不意でした。それが御嬢さんを

早く片づけた方が得策だろうかという意味だと判断した時、私はなるべく緩くならぬ方が可いだろうと答えました。奥さんは自分もそう思うと言いました。(十八)

静のこの行為の意味を明らかにした石原千秋氏の説明をやや長く引用しよう⁵⁾。

お嬢さんは一昨日先生が買ってくれた反物をわざわざ戸棚から「引き出して」手にしているのです。しかも、「私の着物も御嬢さんのもの同じ戸棚の隅に重ねてあった」というのです。これが、結婚問題についてのお嬢さんの答えでなくて何でしょうか。また、重ねられた二人の着物が二人の運命の暗示でなくて何でしょうか。これは、文学的想像力の問題です。

お嬢さんの「後姿」だけでは彼女が「この問題についてどう考えている」のか「見当が付」かなかったからこそ、先生はお嬢さんの仕種を注視していたはずなのです。しかし、先生の書き方は巧妙を究めていて、お嬢さんの仕種を注意深く見た結果、お嬢さんの気持ちがわかったことについては一切語りません。お嬢さんの仕種だけを、何のコメントも付けずに書き込んでいるのです。

つまり、先生は実はお嬢さんの気持ちを後ろ姿から読み取ったにもかかわらず、その「読み取った」という一言を書かなかったのです。(中略)

さて、奥さんは、おそらくお嬢さんの仕種と、そのお嬢さんの後ろ姿を注視している先生の様子との両方を確認した上で、突然「どう思うか」と聞いたのです。この時、先生は一瞬「何をどう思うのか」がわからなかったと言っています。しかし、そうではないはずで、先生は、奥さんの言葉を「娘をどう思うか」と聞いてしまったからこそ、一瞬理解が遅れたのに違いありません。

この一瞬に、先生とお嬢さんとの「恋」を三人が共有したのです。(後略)

静の動作から結婚の意志を読み取ったことは、鋭くかつ重要な発見である。ただし、静の意志に「先生」が気づいていたという仮説は少々深読みである。この仮説はその後の彼の言動と整合しないからである。たとえば、静がKを愛している可能性を疑った時、「先生」は次のように悩んでいる。「此方でいくら思っても、向こうが内心他の人に愛の眼を注いでいるならば、私はそんな女と一所になるのは厭なのです。」(三十四)石原氏の仮説どおりなら、静がKを愛しているかという疑問は、静がKに心変わりしたのではないかという

疑問になるべきだろう。結婚の意志を示してから的心変わりには重大な問題だからである。しかし、「先生」は現在の静の気持ちに悩みながらも、心変わりについては全く触れない。これほど恋愛に潔癖な「先生」が、心変わりを全く気にしないとは考えにくい。やはり、「先生」は静の結婚の意志に気づくことはなかったと素直に読むべきだろう。

石原氏は指摘していないが、(十八)の引用部分からは、結婚の意志とともにもう一つ重要な情報が読み取れる。それは「先生」に対する静と奥さんの苛立ちである。静が後ろ姿で気持ちを見せて、すかさず奥さんが「先生」の本音を尋ねる。タイミングだけを見れば、二人が申し合わせてやっているようにも見えるが、この可能性はおそらくゼロである。実は、先ほどの引用の前、奥さんは静の結婚問題について「二三そういう話のないでもない」「此方では左程急がない」「極めようと思えば何時でも極められるんだから」(十八)と余裕を見せている。しかし、この直後に奥さんは「急に改まった調子になって、私にどう思うか」と言って即答を求めてくる。彼女の言葉は完全に矛盾している。しかも、この間には奥さんのものとは思えないほどに不躰である。一体奥さんに何が起こったのか。少なくとも、静と奥さんが事前に申し合わせをして“台本どおり”に演じていたのなら、こんな問い方はしないだろう。静のあの行動を見て、奥さんは胸が詰まったのである。隠しておいた反物を見せて自分の気持ちを示した大胆さ、それを「膝の上へ置いて眺めている」切なさ、奥さんには静の気持ちを痛いほど感じたのである。しかし、「先生」はそんな静の気持ちを全く分かっていない。だから、「先生」を思わず問いただしてしまったのである。

「先生」が静に惹かれていることは明らかなのに、「先生」はどこかで静への気持ち、静との結婚を躊躇している。しかし、奥さんと静には躊躇する理由が全く分からない。静が自分の気持ちを示さずにいられなくなったのは、そんな「先生」への切ない恋心と苛立ちの両方があったからだろう。奥さんには静のこの気持ちが共有できたのである。あの問いの不躰な調子と唐突さには奥さんの苛立ちが反映されている。ここで確認できる二人の苛立ちは、その後の展開を考える上で重要である。静のその後の極端な行動は、苛立ちを抜きにしては理解できないからである。

ただし、「先生」の側にはもちろん静への恋を躊躇させる理由がある。彼には叔父に遺産をだまし取られた苦い経験を思っていたのである。この叔父は亡くなった両親が最も信用していた男であり、彼を頼ることは母親の遺言の言いつけでもあった。信頼し全てを

任せていた叔父に裏切られたことで、「先生」は全ての人間を信用できなくなってしまう。奥さんと親しくなるにつれ「先生」の中で、奥さんが「叔父と同じような意味で、御嬢さんを私に接近させようと力めるのではないか」(十五)という疑いが頭をもたげ始める。この疑惑は静にも向かい、「奥さんと同じように御嬢さんも策略家ではなからうか(中略)二人が私の背後で打ち合せをした上、万事を遣っているのだろう」(十五)と膨らんでいき、彼は身動きがとれなくなってしまうのである。この態度を一変させたのがKへの嫉妬と焦りである。Kの存在がなければ「先生」と静との結婚は、あるいは無かったかもしれない。

奥さんと静が相談した上でKを利用したという解釈は、このような事情を踏まえて支持されている。その上で、房総旅行の後の二度にわたる静の豹変がこの可能性を強く感じさせる。先生とKが夏休みの房総旅行から戻ってみると、それまでしばしば「先生」を嫉妬させていた静の態度が一変している。「御嬢さんが凡て私の方を先にして、Kを後廻しにするように」なり、「何時帰っても御嬢さんの影をKの室に認める事はな」(三十二) くなっている。しかし、「先生」が満足したのもつかの間、二月もすると「御嬢さんの態度がだんだん平気になって」(三十二) それまで以上に「先生」を嫉妬させる言動を取り始める。その後、静の態度はどんどんエスカレートしていき、「先生」の求婚とあの悲劇を迎えることになる。ただし、遺書を丹念に読み返してみても、「先生」とKが旅行に出ていた間、さらに、戻ってからの二ヶ月間に、静を変化させるような特別な出来事は見あたらない。そこで、静の豹変の背景には何か人為的なもの、すなわち、策略があったと推測されることになる。しかし、この推論は誤りである。そう断言する根拠を、有力と思われる順に通し番号を付けて並べてみよう。

- ア 奥さんのさばさばした性格に策略は合わない。
- イ 静の「先生」に対する行為は、やり過ぎである。
- ウ 二人のとった「方法」は策略としてはリスクが高すぎる。
- エ Kの死に際して、静も奥さんも罪悪感を全く抱いていない。
- オ 奥さんはあまりに無神経にKに婚約を告げている。
- カ 「先生」が求婚した時、奥さんに「待っていた」という様子が全くない。

簡単に補足していこう。何と言っても重要なのは奥さんの性格である。例えば、婚約の事実をKに隠そう

としていた「先生」が、奥さんを恐れていたことを思い出して欲しい。「何処か男らしい気性をもった奥さんは、何時私の事を食卓でKに素ば抜かないとも限りません。」(四十七) 奥さんは隠しごとが嫌いなのである。奥さんが竹を割ったような性格であることはこの場所に限らず遺書のあちこちに書かれている。奥さんは、暗くて手の込んだ策略の最も似合わない人物である。

次に根拠のイである。「先生」の嫉妬心を強く刺激した静の言動を思い出して欲しい。静はKの部屋を頻繁に訪問し、あげくにはKと二人で外出までしてしまった。「先生」が行き先を尋ねると、「私の嫌いな例の笑い方」をした上で、しまいには「何処に行ったか中ててみる」(二十四) と、「先生」をからかってくる始末である。この時の「先生」の気持ちを想像して欲しい。ここまで「先生」の気持ちを逆撫でして、静に一体どんな得があるというのか。あるいはカルタでKへ加勢した時も、「仕舞いには二人が殆ど組になって私に当る」(三十四) という極端なことをしたために、「先生」は嫉妬と怒りのあまり逆上寸前となる。これもあまりにやり過ぎである。もしも静が策略で動いていたなら、その目的は言うまでもなく「先生」との結婚である。ならば「先生」に嫌われないことが絶対条件となるだろう。この条件は、嫉妬や焦りといった負の感情の使用をいやでも慎重にするはずである。やり過ぎて嫌われてしまったら元も子もない。少なくとも、相手の不快感が限界を超えそうになれば、手加減かフォローか何らかの手だてを試みるだろう。しかし、静は「先生」の気持ちを少しも考えることなく、やりたい放題に逆撫でするばかりである。もしも静が策略で動いていたなら、こんな無謀なやり方で挑発するはずがない。

次に根拠のウである。仮に二人が策略として「先生」の嫉妬心を刺激したのだとすると、二人は危険を承知であえてリスクの高い方法を選択したことになる。「先生」は嫉妬心を抱きやすい性格であり、奥さんにはそれが良く分かっていたからである。(例えば次の例をあげてみよう。ある日、Kの部屋を通るとKと静が談笑している。「先生」はその場で何も言えず間の抜けた対応をする。夕飯の時、静は先生を「変な人だと」(二十七)評してくる。この時、奥さんは静に対して「睨めるような眼を御嬢さんに向け」(二十七) ている。奥さんが静を睨んだのは「先生」の強い嫉妬を感じたからだろう。) 結婚を目的とする策略ならば、いろいろな方法が考えられるだろうが、嫉妬はその中で最も選ばれにくい手段の一つだろう。特に静が「先生」に恋心を抱いてことを考えると、こんな一か八かの危険

な方法を選択したことはあまりに不自然である。

最後に工と才を少しだけ補足しておこう。もしも、二人が策略家だったとすれば、静と奥さんはKを“当て馬”として利用したことになるが、二人はKに対して、何ら後ろ暗い感覚を持っていないのである。特に、Kの自殺を目の当たりにした時に、二人に特別なショックや罪悪感が見受けられない点に注意して欲しい。もしも二人がKを利用したのであれば、Kの自殺に対して「先生」以上の罪悪感を抱くはずではないか。二人がよほどの極悪人でもない限り。

もう十分だろう。静と奥さんが策略によって「先生」を嫉妬させさせた可能性はゼロである。

3 静はなぜ男たちを翻弄したか

策略でなかったとすると、静はどうしてあそこまでKを翻弄したのだろうか。私の結論を言おう。彼女はただ自然に振舞っただけである。彼女は策略家なのではなく、生来のコケットなのである。「先生」と静の始めの頃の会話を例に検証してみよう。

「先生」が移り住んで間もない頃から、静はしばしば「先生」の部屋で長話をしている。もちろんKが同居する以前のことである。「時たま御嬢さん一人で、用があって私の室へ這入った序に、其所に坐って話し込むような場合もその内に出てきました。」(十三)二人で話す時、「先生」は「妙に不安に」なり「何だかそわそわし出」してしまうが、静はいたって落ち着いている。

然し相手の方は却って平気でした。これが琴を浚うのに声さえ碌に出せなかったあの女かしらと疑われる位、恥ずかしがらないのです。あまり長くなるので、茶の間から母に呼ばれても、『はい』と返事をするだけで、容易に腰を上げない事さえありました。それでいて御嬢さんは決して子供ではなかったのです。私の眼には能くそれが解っていました。能く解るように振舞って見せる痕跡さえ明らかでした。(十三)

男の前で妙に余裕がある、親よりも男を優先する、色気を見せる、どれもコケットの素質である。そわそわしている「先生」と長話しができたのだから、会話をリードすることもできたのだろう。実際、静は、無口で口下手なKとさえ談笑できる能力を持っている。その部分を引用してみよう。「Kの声がひょいと聞こえました。同時に御嬢さんの笑い声が私の耳に響きました。」(三十二) 男の言葉に笑いで答える魅力的な会話

術である。これだけの資質を備えた美人が積極的に近づいてきたのだから、「先生」とKが簡単に参ってしまったのも無理はない。

しかも、静にはやっかいな癖がある。Kと二人で外出した時、あるは正月のカルタの席で、静が「先生」の神経を逆撫でする振る舞いをしたことは既に書いた。この静のやり方はあまりに度が過ぎている。考えて行動したのなら、こんな過激な振る舞いはできないだろう。この時彼女は、何も考えずに“悪ふざけ”をしたのである。男を翻弄する、あるいは嘲笑するような“悪ふざけ”が静の癖なのだ。さらに、静には笑わなくていいところで笑ってしまう癖がある。やっかいなのは「先生」の嫉妬を感じた時に笑ってしまうことである。彼の嫉妬は嬉しいとともに、その時の様子が不自然でごちなく見えるからだだろう。(静自身は異性の前で緊張しないことを思い出して欲しい。) 静にとっては自然に出てしまう笑いかもしいが、このタイミングで出てくる笑いは、「先生」とKの両方を刺激し翻弄せずにはおかないだろう。そして、静は男の気持ちに極めて鈍感である。彼女の鈍感には、彼女の“悪ふざけ”や笑いと言表の関係性をなしている。何も感じないから無邪気に振る舞える。だから「先生」とKをここまで翻弄してしまったのである。

誰もが美人と思う容姿を持ち、コケットの素質を備え、“悪ふざけ”と笑いで無邪気に男を翻弄する。静は“男の敵”と言いたくなるような、まことにやっかいなコケットなのである。

さらに、静の中に、煮え切らない「先生」に対する苛立ちがあったことを思い出して欲しい。これが、彼女の奔放な振る舞いにある種の挑発、あるいは攻撃性を加えたことは間違いないだろう。

ここで、奥さんに目を転じてみよう。奥さんは「先生」の嫉妬を敏感に感じとっており、初めの頃は静の無神経な振る舞いをたしなめていた。この気遣いの最も顕著に感じられるのが、先に指摘した房総旅行後である。房総旅行の後、「御嬢さんが凡て私の方を先にして、Kを後廻しにするように」なり、「何時帰っても御嬢さんの影をKの室に認める事はな」(三十二) くなる。Kと話していた静が、「先生」に見られないように、「あたかもKの部屋から逃れ出るように」(同) 姿を消すという場面も登場する。静のこの不自然な振る舞いの背後に奥さんの意志があることは明らかだろう。「先生」とKとが旅行に出ている間、「先生」を嫉妬させないよう静を強く諭したのに違いない。しかし、二月もすると、静は「だんだん平気になり」以前にも増して奔放になる。表面だけを見ると、策略家の奥さんが「快適路線」から「嫉妬路線」に方針転換したか

のようにも見える。が、もちろん奥さんはそんなことはしていない。彼女は「先生」への気遣いを止めただけなのである。「先生」の嫉妬を気にした奥さんは、先生に不快感を与えないように静を諭した。これが結婚を意識したものであることは言うまでもない。しかし、策略や隠し事の嫌いな奥さんには、この気遣いすら策略のように思えて嫌気がさしたのではないか。さらに、「先生」への苛立ちは奥さんの中にもある。その「先生」のためにどうして静をここまで我慢させるのか。奥さんが腹立たしさを感じるのはむしろ当然である。策略じみたことは止めにして静を好きなように行動させてやろう、奥さんはそう思ったに違いない。だから、これ以降、静がどんなに奔放な振る舞いをしようと、奥さんが静にブレーキをかけることはなくなるのである。

そろそろまとめに入ろう。Kは静のコケットに魅了され恋に落ちる。そして、恋の苦しみが頂点に来た時、「先生」の言葉にとどめを刺されて自殺してしまう。「先生」の言葉がどのようにKを殺したかについては、スペースの関係上別の場所に書くしかないが、「先生」の言葉がKを“殺す”過程についても漱石は実に緻密に書いている。「先生」も静のコケットに魅了され、さらに翻弄されてKへの嫉妬と恐れに悩む。Kへの恐れが「先生」の観察・判断を大きく狂わせ、容赦ない言葉の攻撃によってKを死に追いやった。そして、奥さんはただそれを傍観していた。

この作品では、全ての登場人物にそれぞれの罪に見合う苦しみが待っている。恐ろしいのは、罪の重さが本人の意志とは無関係に結果で計られていることであ

る。Kは自分自身を高めようというエゴのために、養子の親と実家とを不幸にする。さらに、「先生」の下宿に同居することで「先生」を苦しめた。その結果があのだ。自殺である。「先生」はKを死に追いやった張本人であり、彼にはKに対する悪意があった。だから「先生」の苦しみは大きい。静はただ奔放に振舞っただけであるが、Kと「先生」を苦しめた全ての原因は彼女のコケットにある。だから、静には「先生」と同等以上の苦しみが待っている。ここには、男社会の秩序を破壊する女性という漱石文学の一つのテーマを読み取ることができるかもしれない。奥さんには、静のコケットを傍観し放置した罪がある。ただし、奥さんの罪は「先生」や静ほど重いものではない。だから、奥さんは静と「先生」の影のある夫婦生活を間近に見ながらも、「先生」の自殺を知ることはなかったのである。

【注】

- 1) 例えば次の文献を参照。水川隆夫『夏目漱石「ころ」を讀みなおす』p.7 (平凡社新書, 2005)
- 2) 石原千秋『漱石と三人の読者』pp.160-162 (講談社現代新書, 2004)
- 3) テキストは新潮文庫『ころ』(平成9年)による。漢数字は章番号。裸の番号は第三部、それ以外は番号の上に上または中をつけて引用。
- 4) 例えば次の文献を参照。水川前掲書, p.118
- 5) 石原千秋『『ころ』大人になれなかった先生』pp.97-98 (みすず書房, 2005)